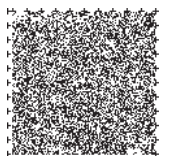


I

Field Cast・City Castについて

1. Field Cast・City Cast
2. Field Cast・City Castが支える東京2020大会
3. ボランティアの役割と意義



I. Field Cast・City Castについて

1. Field Cast・City Cast

大会を成功させる一員として大切にしたい思い

下記の「私は輝く」は、東京2020大会を成功させる一員として大切にしたい思いを表したものです。活動を通じて大会を楽しむこと、それが自分自身を変え、ひいては世界を変えることにつながります。「私たち」ではなく、「みんな」でもなく、「私」が輝くというところに、一人ひとり、全員が輝くことをイメージしました。

私は輝く

楽しむ、変わる、世界を変える。

一生に一度の東京2020大会。だからこそ、この機会を心から楽しむ。

人と出会う楽しみ。人を笑顔にする楽しみ。やり遂げる楽しみ。

人にはそれぞれの楽しみ方がある。その楽しみの中には、一歩踏み出した自分がある。

一歩踏み出した自分は、自信に溢れ、輝きを放つ。自ら楽しむ人は輝いている。

一人ひとりの輝きが集まり、やがて大きな輝きとなる。

そしてそれは、世界と未来を変える力となる。

新しい世界と未来を私たちが作り出す。そのために、いま、私は輝く。

東京2020大会スタッフおよび都市ボランティアのネーミング

ボランティア応募者による投票により、東京2020大会スタッフおよび都市ボランティアのネーミングが「Field Cast（フィールドキャスト）」「City Cast（シティキャスト）」に決定しました。

競技場などで選手と関わりながら活躍する人、そして、競技場と競技場を結ぶ街で観客のみなさんと関わりながら活躍する人がいます。一人ひとりに、大会を盛り上げる重要な役割を担ってほしい。そんな願いがキャスト（配役）という言葉に込められています。

大会スタッフ・ボランティア ネーミング

Field Cast

フィールドキャスト

都市ボランティア ネーミング

City Cast

シティキャスト

東京2020大会を支えるField Cast・City Cast

オリンピック・パラリンピックは「世界最高峰」に位置づけられる、スポーツの総合競技大会です。それを支えるのは、ボランティアだけでなく、東京2020組織委員会の職員、選手団、警備や交通に関わる人たち、そして大会に携わる多くの企業の方々なども含めた多様な人の集まりです。

大会を支える関係者



Field Cast (大会スタッフ)

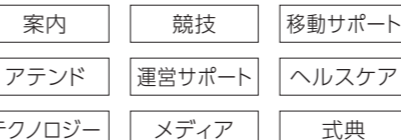
東京2020組織委員会職員

委託事業者

飲食サービス、清掃、警備 など

その他

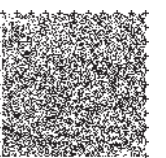
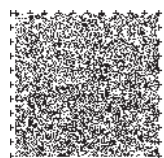
大会ボランティア



City Cast (都市ボランティア)

全国各地で支えるボランティア

*1 IOC 国際オリンピック委員会
*2 IPC 国際パラリンピック委員会



I. Field Cast・City Castについて

ボランティア経験者インタビュー①

一番大切なのは「楽しむこと」



リオ2016大会に、当時大学生としてボランティアに参加した3人。彼女たちが初めてのスポーツボランティア体験で感じたことを、思い思いに語り合ってもらった。

普段の生活では味わえない経験

—みなさんは学生の時に、リオ2016大会にボランティアとして参加されたんですよね？

三都須マユミ (以下、三都須):2016年の2月に大学で、通訳に携わるボランティアの募集を知ったんです。

—迷いはありませんでしたか？

田澤玲実 (以下、田澤):なかったですね。これは行かなきゃって(笑)。

菊池理佳 (以下、菊池):ブラジルに行ける機会なんて滅多にありませんし、それに「オリンピック・パラリンピック」という言葉の響きにも惹かれて。

田澤:もちろん心配事はいくつかありましたが、それ以上に期待感、ワクワク感のほうが大きかった。

—実際に訪れたリオで、出発前のイメージとの「ギャップ」は感じませんでしたか？

菊池:初めてのボランティアだったので、行く前は「本当にちゃんとできるのかな」という不安や多少のプレッシャーはありました。でも、現地でブラジルのボランティアの方たちと接して、そんな不安もすぐに消えましたね。彼らの中にあっちは、「働く」とか「一生懸命に頑張る」といった感覚ではなく、「ボランティアが楽しんでこそ、来場者も一緒に楽しむ」というマインド。だから私も、「仕事をする」のではなく、大会を心から楽しめばいいんだって思えるようになったんです。良い意味でのギャップでしたね。

田澤:期待通りだったのは、スケールの大きい、グローバルな環境に身を置けたことです。それは自分にとってすごく大きかった。競技会場での通訳が活動内容の2人とは違って、私が配属されたのは世界中の報道関係者の拠点となる

MPC (メインプレスセンター)でしたが、本当にさまざまな国からボランティアの人たちが来ていて、「世界がここに集まった」って実感できました。

三都須:私もそれはすごく新鮮でした。英語とポルトガル語が飛び交う中で、いろんな国の人たちが交流する。普段の生活では絶対に味わえないような経験でした。

広がっていくスポーツへの関心

—こんな選手のインタビューを担当した、というのは？

三都須:水泳会場が担当だったんですが、200mバタフライで銅メダルを取った星奈津美選手や、パラリンピックでは4個のメダルを取った木村敬一選手のインタビューも担当できました。

菊池:私は柔道とレスリングの会場に配属されて、ラッキーなことに吉田沙保里選手の最後の試合でインタビューを担当できました。(決勝で敗れて)号泣している吉田選手が目前にいて……。

—すごい経験をしましたね。

菊池:実を言うと、それまでスポーツにはあまり興味がなかったんです。でも、吉田選手の試合の時にブラジルの人たちがすごい盛り上がりで、「アイ・ラブ・サオリ!」って叫んだりしていて、それを見て、スポーツって観戦する側もこんなに熱を持つんだって、初めて知ったんです。スポーツへの関心が広がっていくきっかけになりましたね。

田澤:体操で日本の男子団体が金メダルを取った瞬間は、MPCにいても他の国の人たちが「ジャパーン!」と言って祝福してくれて、それは嬉しかったですね。4年後が東京開催ということもあって、みんなすごく親しみを持って接してくれました。

どれだけ楽しめるかは自分次第

—ボランティアのチームにはさまざまな国籍の人が？

田澤:そうですね。それに年齢層も大学生から年配の方まで幅広かったですね。

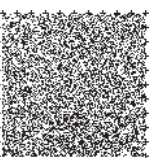
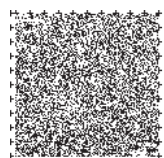
菊池:私のチームのリーダーは優しいお父さんみたいな方で、「これもできます、あれもできます」と言っても、「大丈夫、大丈夫」って(笑)。それで「頑張ってるから」ってブラジルのお菓子をくれたり(笑)。

三都須:私はオリンピックとパラリンピックで違う女性のリーダーでした。オリンピックは40代くらいの優しい人で、パラリンピックは同世代のとても素敵な方でしたね。

田澤:リーダーによってチームの雰囲気とかやり方は変わるよね。私のリーダーはとても洗練された男性だったんですが、「こういう風にした」と言えば、いろいろと対応を考えてくれて、それで私は体操会場に行くことができたんです。

三都須:待ちの姿勢ではなく、自分から積極的に動けば、役割を振ってくれる。

菊池:私はそれで、誘導の役割も担当したよ(笑)。



I. Field Cast・City Castについて

——リオでの活動の中で、国民性の違いを感じたことはありませんでしたか？

田澤：ブラジルの陽気でフレンドリーな雰囲気には助けられました。初日に道に迷って遅刻をしてしまったんですが、何事もなかったように「ようこそ！」って迎えられました（笑）。

菊池：毎日、何が起るかわからない緊張感はありましたが、たとえ想定外のことが起きててもそれが当たり前というか、いちいち驚いてはいられない。

三都須：そういう耐性はつきましたね。

——東京2020大会では、リオ2016大会のようなおらかさはないかもしれませんね？

田澤：「仕事」だからなんでもきっちり、ではなく、もう少し柔軟に、失敗にも寛容になっていいと思います。良い意味でのブラジルのおおらかさと日本の真面目さがミックスされるいいですね。

三都須：逆に「すべてきっちりやろう」と思って参加すると、戸惑うかもしれません。細かいことにあまり敏感にならず、若干の柔軟さも必要ですね。

菊池：オリンピックなんだし、まずは楽しまない



田澤玲実
(たざわ あきみ)さん

と。そもそも「仕事」と考えないほうがいい。

田澤：ボランティアは自発的にやるものだからね。任されてやるのではなく、楽しんでやるというのが一番大切だと思います。

三都須：みんなに同じ量の、同じ質のものがあるわけじゃない。それがボランティアなんだって、リオで知りました。その中で気持ちをどう高め、どれだけ楽しめるか。すべては自分次第だと思います。

芽生えたコミュニケーションの積極性

——リオで学んだことを、東京2020大会でどのように活かしたいですか？

菊池：来た人が、ちゃんと東京を見て帰るようにしてあげたい。私は現地で知り合ったタクシードライバーの方に、リオの街を案内してもらった良い思い出があるのですが、ボランティアとして接していないときでも、東京のここがいいよって、誰かに教えてあげられるようにできたらいいですね。

三都須：リオではボランティアのユニフォームを着ていると、バスの中で急に話しかけられたりしました。そんなフレンドリーな雰囲気が、東京にも生まれればいいな。

——こういう風にしたら楽しめるよ、というアドバイスはありますか？

菊池：私たちは、なんでも教科書通りにやらなきゃって思いがちですが、「現場で感じて、現場で学ぶこと」のほうが多いんです。そして、いろんな考え方があることを理解し受け入れる。

田澤：きちんとやれるのか不安に感じている人もいるかもしれませんが、東京2020大会に当事者として関わりたい、大会を楽しみたいという気持ちがあれば大丈夫。失敗したってかまわないんです。

——リオ2016大会での経験は、その後にご役に立っていますか？

田澤：それまでは英語を使うとなると躊躇することもありましたが、実際に現地でコミュニケーションをとって、自信になりましたね。私はリオ2016大会の後に留学しましたが、不安以上にみんなと仲良くなりたいという気持ちのほうが強かった。英語で積極的にコミュニケーションをとることに抵抗がなくなりましたね。

菊池：「リオ2016大会に行った」という話は、世界中のどこでも、誰にでも通じるんです。それは大きな財産だし、その話をきっかけにコミュニケーションが広がっていく。

三都須：次が東京開催ということもあって、リオではいろんな人が日本に興味を持ってくれました。そこで、自分では想像もしていなかったくらい多くの人とのつながりができた。だからこそ今、こうしてここにいるわけで、当時はまさか私が東京2020大会に関わっていただけるとは思いませんでした。次の大会がある限り、どこかで続いていくんだろうなって。

田澤、菊池：たしかに！（笑）

田澤：よくレガシー（大会後のさまざまな社会的・文化的遺産）って言いますが、それをリオでの活動を通じて、身をもって体験できたような気がします。



菊池理佳
(きくちりか)さん

I. Field Cast・City Castについて

2. Field Cast・City Castが支える東京2020大会

「Field Cast (大会ボランティア)」と 「City Cast (都市ボランティア)」

東京2020大会の大会運営を支える「Field Cast (大会ボランティア)」と、国内外から訪れる多くの観客をお迎えする「City Cast (都市ボランティア)」。
活動内容は異なりますが、ともに協力して大会を盛り上げていきましょう。

	Field Cast (大会ボランティア)	City Cast (都市ボランティア)
活動内容	選手や大会関係者、観客等への案内・誘導など、大会運営をサポートする役割を果たし、大会の雰囲気づくりの一翼を担う	国内外からの旅行者、観光客等を「おもてなしの心」を持ってお迎えし、大会の盛り上げの一翼を担う
活動場所	競技会場、選手村などの大会関係施設	空港、主要駅、観光地、競技会場の最寄駅周辺およびライブサイト
運営・募集	東京2020 組織委員会	東京都をはじめ、競技会場が所在する自治体等

Field Cast (大会ボランティア)の役割

Field Castは、主に大会前後および期間中、競技会場や選手村などの大会関係施設における案内・誘導など、大会運営において重要な役割を果たすことが期待されています。

【主な役割】



案内
会場内等での観客や大会関係者の案内



移動サポート(運転等)
大会関係者の会場間の移動時に車を運転



運営サポート
競技会場、選手村、車両運行等の様々な運営サポート



競技
競技・練習会場での競技運営等のサポート



アテンド
海外要人等の接遇、外国語でのコミュニケーションサポート



ヘルスケア
搬送サポート、会場内の巡回、ドーピング検査のサポート



テクノロジー
通信機器等の貸し出しや回収等のサポート、競技結果の入力・表示



メディア
国内外のメディアへの様々なサポート



式典
表彰式での選手や大会関係者の案内、表彰式運営のサポート

City Cast (都市ボランティア)の役割

City Castは期間中、空港や主要駅、観光地等において、国内外からの旅行者への観光・交通案内や、競技会場の最寄駅周辺における観客への案内等を行います。
都市の「顔」として、選手をはじめとする大会関係者や国内外からの旅行者・観客等を「おもてなしの心」を持ってお迎えするとともに、明るく、楽しい雰囲気でお迎えすることで、大会を盛り上げることが期待されています。

【活動内容】

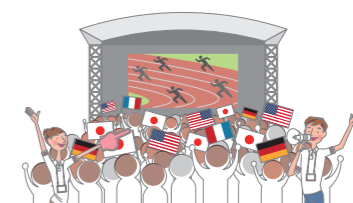
注：下記は東京都で運営するCity Castの場合です。運営する自治体ごとに活動内容は異なります。



観光・交通案内
空港・駅・観光地における国内外からの旅行者に対する観光・交通案内

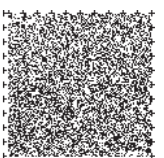
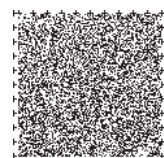


観客の案内
競技会場の最寄駅および競技会場までの動線(ラストマイル)における観客への案内、盛り上げ

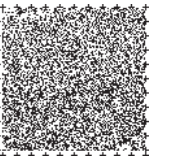


ライブサイト*等における案内・運営サポート
来場者案内、会場内運営サポート

*ライブサイト・競技会場以外で東京2020大会を体感できるよう、大型スクリーン等を設置した競技中継、ステージイベント、競技体験等を実施する場所をいいます。



I. Field Cast・City Castについて



ボランティア経験者インタビュー②

誰もが大会の「当事者」になれる



西川千春 (にしかわ ちはる) さん
1990年から28年間、ロンドンに在住。オリンピック・ボランティアとしてロンドン2012大会、ソチ2014冬季大会、リオ2016大会に参加する。日本スポーツボランティアネットワーク特別講師。世川スポーツ財団特別研究員

ロンドン2012大会で「人生最高の2週間」を体験したという西川千春さん。自称「オリンピック中毒者」が語るオリンピック・ボランティアの魅力とは？

将来にわたって続く友情が生まれる

—ご自身を「オリンピック中毒者」とまで言われる西川さんですが、オリンピック・ボランティアの魅力とはいったい何でしょう？

西川千春(以下、西川):やっぱり一番は「楽しい」ということ。子どもの頃からスポーツが大好きで、オリンピックも大好きだった私が、この世界的なスポーツイベントに、「当事者」として参加できるわけですからね。それだけで興奮します。

—実際に、「大会の一員になった」と実感した瞬間はいつですか？

西川:ロンドン2012大会が終わった直後に、イギリス選手団の祝勝パレードが行われたのですが、そこにボランティアも一緒になって参加できたのは、忘れられない思い出ですね。言ってみればボランティアは、選手と同様にその国の代表なん

です。イギリスの方々は、自分の時間というのをとても大切にします。その貴重な時間を社会のために提供するボランティアに対して、みんながリスペクトし、応援してくれる。閉会式でも、我々のためにスタンディングオベーションが沸き起こりましたからね。あれを聞いて、「チームGB」(GB=グレートブリテンの略)の一員になれたと実感しました。

—オリンピックの3大会は、いずれも「言語サービス」として活動をされましたが、特別な思い出はありますか？

西川:何と言っても、ロンドン2012大会で日本の女子卓球団体が、メダル獲得を決めた歴史的瞬間に通訳として立ち会えたことですね。試合が終わった直後に、汗だくで興奮冷めやらぬ選手の言葉を、こちらも汗だくになって通訳する。それはやはり特別な体験です。

—チームとして活動する上で、大切にすべきことは何でしょう？

西川:ボランティアのチームというのは、年齢も性別も社会的地位も関係なく、みんな立場は同じなんです。オリンピックともなれば、それこそさまざまな国籍の方がやって来ます。そういう人たちと交流し、いろんな話ができる良い機会だと捉えることですね。アルバイト先の上司や学校の先生とも違う、普段の自分の交友範囲ではおそらく話すこともないような人たちと交流ができる。私はイギリスの海軍で艦長をやっていた方とも知り合いましたが、どの世代でもきっと得られるものはあるはずなんです。

—多くの人と出会えることも、ボランティアの魅力？

西川:特にオリンピックの場合は活動期間が長いし、10日間も一緒にやれば、「同志」のようになる。そして、将来にわたって続く友情が生まれるんです。

—西川さんはロンドン2012大会で「人生最高の2週間」を体験されたとおっしゃっています。東京2020大会に参加するボランティアの人たちにも、大会後にそう言えますか？

西川:ほとんどの人がそう言えると思いますよ。それだけすごいイベントだし、人の数だけ感動、興奮がありますから。そのためにも、とにかく楽しむこと。自分から飛び込んで、一緒に騒いだほうが断然楽しいですから。

—「楽しむ」がキーワードですね。

西川:ボランティアの一番の役割は、いらっしゃった方を笑顔で迎えることなんです。それは、職場やバイト先で見せるような仕事上の笑顔ではなく、楽しいという気持ちから生まれる自然な笑顔。そういう顔が大会全体の印象につながっていくんです。ロンドン2012大会もそれで成功したし、

リオのボランティアもみんな本当に明るかった。「仕事」だからと考えて肩肘を張らず、それぞれがパーソナリティを発揮すればいいんです。

—東京2020大会の経験は、未来にどうつながっていくと思いますか？

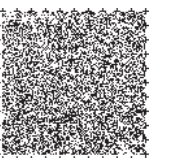
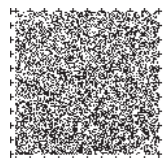
西川:多様性をどのように受け入れ、いかにして共生社会をつくりあげていくかを考える良いきっかけになると思います。以前はロンドンも、例えば障がい者の方たちにどのように接していいかわからない人が多かった。けれどパラリンピック開催を契機に人々のメンタリティが変わって、困っている人がいれば自然と手を差し伸べるような社会になっていったんです。

—価値観が変わると？

西川:それでも、あまり堅苦しく考えないことです。よく日本人は、「人に迷惑をかけることはやってはいけない」と言いますが、インド出身の友人はこう教わったそうです。「人はさまざまなものだから、多少は大目に見てあげなさい」と。これが多様性を受け入れるということなのかもしれません。

—では、東京2020大会にボランティアとして参加する人たちにメッセージを。

西川:今は不安に思っている人も、きっとユニフォームに袖を通したら、それだけで楽しい気持ちになれると思います。不思議な魔力があつたユニフォームにはあつて、あれを着ると本当に変身しちゃうんです(笑)。そんな人たちが東京の街に溢れ出せば、自然とワクワク感が高まってくるでしょう。何より、自分の国で、自分たちが住んでいる街で開かれるオリンピック・パラリンピックに、当事者として参加できるんですよ。これから選手になるのは難しいでしょうが、ボランティアなら、誰もが当事者になれるんです!



I. Field Cast・City Castについて

ボランティア経験者インタビュー③

「感謝の言葉」が喜びに



国内外からの旅行者をおもてなしするのが、都市ボランティアの役割。ここでは実際に東京都観光ボランティアとして「街なか観光案内」を行っているおふたりに、活動内容やそのやりがいなどについて話を聞いた。

日本を好きになってもらいたい思いで

——東京都観光ボランティアをやろうと思ったきっかけは？

鳴嶋一明(以下、鳴嶋):やはり東京2020大会の開催が決まったというのが大きかったのですが、実は背中を押してくれたのは奥さんのひと言でした。東京都の広報誌に東京都観光ボランティアの募集が載っているのを見て、「これ、あなたに合っていそうだからやってみたら?」と言われたんです。自国で開催するオリンピック・パラリンピックは、もしかしたら私にとって人生最後のビッグイベントになるかもしれない。これに何らかの形で参加したいと思ったのがきっかけでした。

小坂雅代(以下、小坂):東京都の観光ボランティア制度は、2002年の日韓ワールドカップを機にできたもので、私自身は2005年に登録を

しました。ここに2015年6月から、新宿や上野などを歩く外国人観光客を外国語で案内する「街なか観光案内」という新たな役割が加わって、これは楽しそうだなと思ったんです。幸い英語ができましたし、週末を利用できるのも大きかった。いずれにしても、海外からのお客さんに東京の街を知ってもらい、日本を好きになってもらいたいというのが、この活動を始めた一番の理由ですね。

——ボランティア活動を通じて、どんなときにやりがいや喜びを感じますか？

鳴嶋:いろいろな国の方たちとお話ができて、互いにコミュニケーションがとれることです。特に海外の人たちにさまざまな提案をして、「あ、私もそういうところに行きたかったんだよね、ありがとう」などと感謝の言葉をいただくと、本当に嬉しくなります。



小坂雅代(こさか まさよ)さん
2005年に活動開始。都内在住。対応言語は英語

小坂:私も同じで、「ありがとう」という言葉をいただけることが、何よりの喜びですね。例えば、海外からのお客さんに身振り手振りで案内をすることもありますが、そんなときに「ありがとう。自分の国に帰ったら、日本はこんなに優しい国だったって、みんなに話すよ」って、あちらも身振り手振りで言ってもらえたりすると、本当に良かったなって思うんです。

まずは小さな親切から始めればいい

——良いボランティア活動をするために、心がけていることはありますか？

小坂:道案内をする際は、できるだけ地図に頼らず、「ここに行くとなんが見えます」というように、実際に見える目印を案内するように心がけています。特に私がよく担当する上野では、地図で見ても分かりづらい場所が少なくありません。ですから、自分自身でその場所に行って、そこに立ったときに何が見えるかを確認するようにしています。「目で見てわかるご案内」を大切にしていますね。

鳴嶋:私の場合は、その方が何をしたいのか、まずはヒアリングを重視するようにしています。具体的な情報を聞き出して、それに対応する。あとは、家族構成や年齢などを見て、例えば階段の有無や、ベビーカーで行ける場所かどうかを伝えるなど、きめ細やかな案内を心がけるように

しています。また、「300m先の右側です」とか「5分ぐらい歩きます」といったように明確な数字を用いると、より分かりやすい案内につながると思います。

——では、東京2020大会で初めてボランティア活動に参加する方に向けて、メッセージをいただけますか？

鳴嶋:「共感」、「共生」、「感動」がボランティア活動の3つの柱だと、私は思っています。ただ、難しく考える必要はありません。よく「おもてなし」と言われますが難しく考えて構えてしまうと、活動もやりにくくなるでしょう。ですから、まずは本当に小さな親切から始めればいいんです。きっと、その小さな親切の積み重ねの中から、楽しみとかやりがいを感じていただけると思います。

小坂:鳴嶋さんのおっしゃる通りに、構えてしまったり、「自分にちゃんとできるんだろうか」と不安に思われたりする方も多いのですが、とにかくやってみてくださいと言いたいですね。最初は失敗もするでしょうが、そうした経験も一つひとつ積み重ねていけばいいんです。おそれずに、肩の力を抜いてとにかく楽しむこと。自分自身が楽しむことが、ボランティア活動を行う上で何よりも大切なんです。



鳴嶋一明(なるしま かずあき)さん
2015年に活動開始。都内在住。対応言語は英語

I. Field Cast・City Castについて

コメント集 ～私たちが体感したオリンピック・パラリンピック～

4年に一度のオリンピック・パラリンピックという大きな舞台。
参加するのは選手だけではありません。大会を支える私たちが舞台を形づくります。
選手もボランティアも観客も、みんなが主役です。

「一番印象に残っているのは、
「みんなが笑っていたこと」
(イギリス人女性/
ロンドン2012大会都市ボランティア)

「世界がここに集まった」
って実感できた
(大学生女性/
リオ2016大会ボランティア)



「スポーツって観戦する側も
こんなに熱を持つんだって、
初めて知った。スポーツへの
関心が広がるきっかけになり
ました
(大学生女性/
リオ2016大会ボランティア)

「とにかく楽しむこと。一緒に
騒いだほうが断然面白い
(50代男性/
ロンドン2012大会ボランティア)

「得られたのは、世界中の方々
と出会う機会と、大きなグ
ループの中で活動する喜び
(イギリス人男性/
ロンドン2012大会都市ボランティア)



「みんなに同じ量の、同じ質の
ものがあるわけじゃないのが
ボランティア。その中で自分が
気持ちをどう高めて、どれだけ
楽しめるか。すべては自分次第
(大学生女性/
リオ2016大会ボランティア)

「訪れる人も迎える側も、
お互いが良い気分を味わえる
(イギリス人女性/
ロンドン2012大会都市ボランティア)

「新しい趣味をつくる感覚で
いいんです。スポーツを「する」
「みる」もいいですが、「ささ
える」という趣味はどうですか?
(40代男性/
リオ2016大会ボランティア)

「普段の交友範囲では話さな
い人たちと交流できる。多く
の人と出会うのが、ボラン
ティアの一番の魅力
(50代男性/
ソチ2014冬季大会ボランティア)



東京2020大会のボランティアは「チーム」として活動します

ボランティアの活動は、基本的に「チーム」として行います。チームには「リーダー」と「メンバー」が存在し、ともに協力しながら大会の成功を目指します。

【リーダーの基本的な役割】

- ・主催者とメンバーのかけ橋となり、チームの役割をメンバーに伝える
- ・メンバーの一人ひとりが活動で輝けるように支援をする(連絡・調整、声かけ・動機づけなど)

【メンバーの基本的な役割】

- ・大会の成功に向けて、チームの役割*を理解し、メンバー同士で協力する
- ・各自の役割を果たすことでチームに貢献する

*それぞれのチーム活動については、各配置場所にて確認してください。



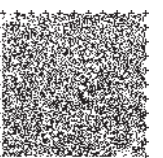
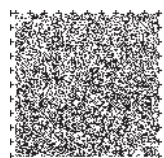
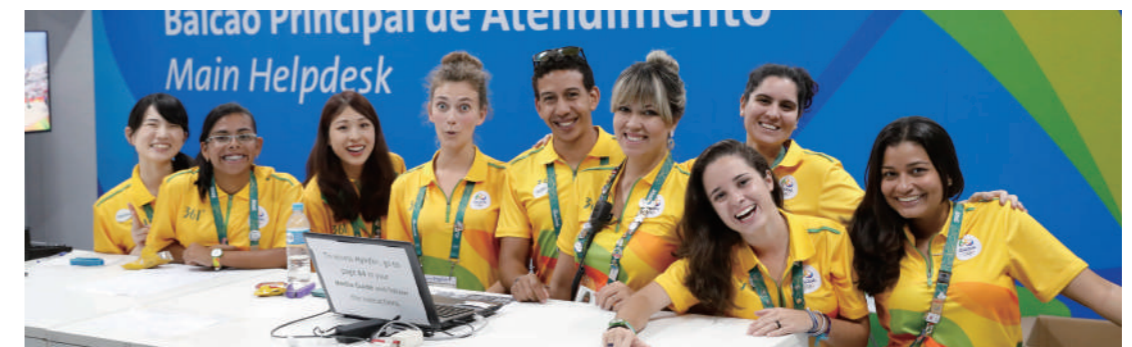
チームとして活動するとき、一番大切なのはコミュニケーションです。お互いに気持ち良く、楽しく、東京2020大会のボランティア活動ができるように、リーダーとはもちろん、メンバー同士や観客、選手、大会関係者など、積極的にコミュニケーションをとるように心がけましょう。

※P.117:チームの中でのコミュニケーション 参照

一人ひとりが発揮するリーダーシップ

「リーダーシップ」と聞くと、組織やグループのトップやリーダーが持つスキルというイメージがありますが、ボランティア活動のように自ら志して参加する人が集まった集団では、役割としてのリーダーだけではなく全員がリーダーシップを発揮して行動します。

そのときに大切なのは、チームの目的が定まっていること、さらにその目的がメンバー間でしっかり共有できていることです。そうすれば、チームの一人ひとりが、「自分は何をするためにそこにいるのか、そのために何をしなければならぬのか」を考えながら活動することができます。すべてのボランティアがリーダーシップを発揮することで、少数のリーダーで率いられている場合よりも高い成果を生むことができるといえます。



I. Field Cast・City Castについて

ボランティア経験者インタビュー④

メンバー一人ひとりにもリーダーシップを



チーム活動を円滑にする、理想のリーダーシップとフォロワーシップとは――。スポーツボランティアの現場から多くのことを学んだおふたりに、話を聞いた。

メンバーとして学びたい コミュニケーションの大切さ

――まずは、おふたりの初めてのリーダー経験について聞かせてください。

竹澤正剛(以下、竹澤):初めてのスポーツボランティア体験が第1回の東京マラソンで、その時にいきなりリーダーを任されたんです。ただ、メンバーの出欠を取り、活動内容を説明してといったことは、ビジネスパーソンとしてもある程度やってきましたから、特に驚くようなこともありませんでした。それでもスポーツボランティアは楽しくあるべきだと意識して、当日は大雨の中でしたが、とにかく盛り上げようと努めましたね。

――リーダーにはいろんなタイプがいると思いますが、竹澤さんは?

竹澤:どちらかというと、メンバーに委ねるタイプ

です。例えば給水係をやったことがある人がいれば、そういう人たちを集めてチームを作って任せてしまう。

新田祐己(以下、新田):私の場合は、東京マラソンで2年間メンバーを経験した後にリーダーをやったのですが、メンバー時代にベテランの方たちに囲まれて、いろんなことを学べたのが大きかったですね。メンバー同士のコミュニケーションがいかに大切かを知れたので、それはリーダーになってから活かすことができたと思います。

竹澤:逆に私はリーダーをやった後にメンバーを経験しました。つまりメンバーの中には当然、リーダーよりも経験豊富な方もいるわけです。そういう状況で、どれだけ委ねてしまえるかがポイントで、それをメンバーの方たちがやりがいを感じていただけると、チームはずごく盛り上がる。少し引いてメンバーを見守るくらい

がちょうどいい。もちろん困っている方がいればサポートはしますが、多様なメンバーが楽しく活動できるように“演出”するのが、リーダーの一番重要な役割なんじゃないかと思っています。

――引っ張っていくようなタイプはあまりいないと?

新田:リーダーが最初にすべてをかちと決めてしまうと、イレギュラーな出来事が起こったときに、臨機応変に対応できなくなってしまいますよね。だから私も、リーダーとしては一歩引くように心がけています。自分だけ先に進んで、振り返ったら誰もついてきていない状況は恐ろしいですから(笑)。

――リーダーとして活動していて、喜びを感じる瞬間は?

竹澤:そこにいたメンバーが、次の年にリーダーになっているのを見た時。私のチームにいた男性から翌年、「あなたが楽しそうにやっていたから、今年は私もリーダーをやります」って言われたことがあるんですが、あれはたまらなかったですね。

新田:最後に「今日は楽しかった」、「活動をやってよかった」って言われると、やっぱり嬉しいですよ。

――逆に辛いと思うことはありますか?

竹澤:昔は給水所で通りすがりの方に、「私にも飲み物をくれませんか?」などと言われてたりもしましたが、大会自体が成熟して、最近ではそういうこともなくなりました。ただ、肝に銘じなくてはならないのは、そういった場面でのボランティアの接遇の仕方ひとつで、大会のイメージ、もっと言うと大会の存続にも影響を及ぼすということです。

「笑顔で接する」「心と体の安全確保」
「明確な指示」が三箇条

――良いチームになるための条件とは?

新田:やっぱり、大会を成功させたいとポジティブに思っている方がたくさんいると、チームは良い方向に進んでいきますよね。

竹澤:基本的にはみなさん前向きな気持ちで参加してくれています。ただ、支えることが素晴らしいと思って参加しているというより、お祭り感覚で、とにかく自分たちが楽しむために来ていますよね。もちろん、やるべきことはきちんとやったうえで楽しむことが大前提で、そのコントロールはリーダーがしなくてははいけませんけど。

新田:竹澤さんが、良いチームを作るうえで心がけていることは何ですか?

竹澤:「笑顔で接する」、「心と体の安全確保」、「明確な指示」。それが三箇条かな(笑)。



竹澤正剛(たけざわ まさよし)さん
東京マラソンで長年ボランティアリーダーを務める。
リオ2016大会でもボランティアを経験

I. Field Cast・City Castについて

——「明確な指示」というのは、経験によって
培われるものですか？

竹澤:事前準備だと思います。マニュアルを読む、現場の下見をする、そして「ここに観客の方が入ってきたらどうしよう」とか、想像を膨らませる。

新田:リーダーになってすぐの頃、当日になってメンバーが全然来なかったことがあったんです。その時には私も想像を膨らませて、「そうになったら、この人員配置はこうしよう」とか、事前に心の準備はしていましたね。

竹澤:事前準備が大切なのは、メンバーも同じなんですよね。誘導係であったらどんなお客さんが来るか想像しておくとか、会場に一度足を運んでおくとか。

先頭に立って引っ張るのではなく メンバーを引き込む空気感を

——竹澤さんはリオ2016大会のボランティアも経験されましたが、東京マラソンとはやはり違うものですか？

竹澤:リーダーであってもメンバーであっても、そのスタンスは何も変わりません。違いは、期間が長い、共通言語が英語である、それくらいです。だから、行ってみて安心しましたね。我々がこれまで東京マラソンでやってきたことと同じことをやれば、オリンピック・パラリンピックのボランティアもできるんだと確認できましたから。

——期間が長い分、予期しないことも多かったのでは？

竹澤:私が配属されたゴルフ競技には、12人の予定が7人のボランティアしか来なくて……。ただ、初日こそ混乱しましたが、リーダーが素晴らしい方だったこともあって、次第に阿吽の呼吸ができていったんです。期間が長くいいのは振り返りができること。日々知見が積み上がっていくので、その点ではやりやすかった

ですね。

新田:私にとっては未知の世界。でもきつと、長い期間一緒にやっているとメンバー同士の絆も生まれて、心地よい活動ができるようになるのかなって想像できます。

——東京2020大会では、新田さんはどんな分野で活動したいですか？

新田:倍率は高いでしょうが、ずっと陸上競技をやってきたこともあるので、競技には関わりたいですね。

——東京開催ということで、竹澤さん自身、リオの時とは心構えが違うものですか？

竹澤:もちろん自分の国でやるというのはものすごいインパクトですが、それほどスペシャル感はないんです。先ほども言ったように、地域のスポーツボランティアと、やることはそれほど変わりませんから。

新田:ボランティアって、そんなに難しいものではないですからね。

竹澤:新しい趣味を作るような感覚でいいんです。スポーツを「する」、「みる」もいいですが、「ささえる」という趣味はどうですか？って。せっかく世界的なイベントが東京で開かれるわけですからね。もしかしたらすごい選手の近くでサービスができる機会も得られるかもしれない。

新田:私もスポーツには、やるだけじゃなく「ささえる」という視点もあるんだよって、その導入部分は周りの人たちに伝えていきたい。ですが、そこから先の一步踏み出すところは、やっぱり自分自身で決めることなんですよね。

——「こんなリーダーになりたい」という理想はありますか？

新田:先頭に立って引っ張っていくというよりも、気づいたら引き込まれていて、メンバー同士が活発に意見を言い合っているような、そんな

空気感を作り出せるリーダーですね。

自由意思での参加だからこそ 求められるのは「情熱」

——そのうえで、メンバーにこういう意識を持ってほしいというものはありますか？

新田:メンバーの方もやるべきことをきちんと理解している現場は本当にやりやすいんです。少なくともマニュアルはちゃんと読んできてほしいですし、ある程度の準備は整えてきてもらいたいですね。

——一人ひとりがリーダーシップを持って参加する。つまり、フォロワーシップの発揮ということですね。

竹澤:チームとして何をやるのかを理解し、その上でできればいくつかのアイデアを持って参加していただければ、仮にリーダーがいなくても、自然とそれぞれがリーダーシップを発揮しながらチームは回っていくものなんです。全部リーダーが決めてくれるんでしょ、ではなく、目的達成のために自分はどういう貢献ができるのか。そういった考え方を持ってフォロワーシップを発揮していただきたい。ボランティアは自由意思で参加するもの。だからこそ、そこに傾ける情熱は携えてきてほしいんです。

——メンバーが発揮すべきリーダーシップにはどんなものがありますか？

竹澤:簡単なことでいいんです。朝の挨拶で元気よく声を出すとか、リーダーに代わって集場所にメンバーを集めるとか。リーダーだって緊張しているかもしれませんからね(笑)。笑顔で雰囲気盛り上げていただければ、それだけで助かるんですよ。



新田祐己(にった ゆうな)さん
高校2年生の時に初めて東京マラソンのボランティアに参加。大学生からリーダーを務める。

I. Field Cast・City Castについて

3. ボランティアの役割と意義

ボランティアとは

ボランティアの語源は、自由意思を意味する「Voluntas（ヴォランタス）」*。ボランティアは、自発的な意思のもとに成り立つ活動なのです。

日本では、災害ボランティアの活躍もあり、ボランティア活動のイメージが「困った人を助ける活動」と認識される傾向にあります。しかし、欧米では「自分自身を成長させるため」や「コミュニティのため」「余暇時間の有効活用」などといった価値観の方も多いようです。また、街角の寄付など、チャリティとして気持ちを具体的な形にすることもボランティアとして考えられています。

ボランティアに対する価値観は、それぞれが暮らす国や地域、ライフスタイルやライフステージによって異なります。今回の東京2020大会へも、世界中からたくさんのボランティアが参加しています。

そのため、ボランティアへの想いは人それぞれかもしれませんが、それぞれの想いを語り合い、共有し、「ボランティア」の価値観が広がることで、ボランティアの意義や役割を幅広く解釈することにつながります。

大会を支えた私たちが、それぞれの国や地域で、新たな「ボランティア経験者」として、社会を動かしていく一翼を担うことは間違いないでしょう。

*英語のwill(意思)の語源である「volo」は、ラテン語で「自分から進んで～する」「喜んで～する」を意味する。



©ピクスタ



©ピクスタ

ボランティアの魅力とは

ボランティアの魅力とは何でしょうか？

ボランティア活動は、「気づき」から「行動」への連続によって成り立っています。

だからこそ、毎回の活動を通じて自分では気づかなかった視点や、新しい価値観を得ることにもつながるかもしれません。また、活動を通して、「社会や誰かの役に立つこと」で充実感や幸福感、さらに自身の成長や社会とのつながりを実感することもあります。

例えば、日本では一年中さまざまな祭りが行われています。その多くは、自発的に集まった地域の方々の想いや願いによって開催されています。伝統的な祭りを支える人々をあまりボランティアとは称じませんが、まさに自由意思のもとに展開されている活動なのです。

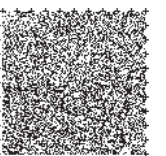
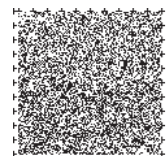
他にも、学校や家庭や会社などで、身につけた知識やスキルを活かすものや、あなたの好奇心や情熱をぶつける活動もあるでしょう。また、街角での寄付など、気持ちを具体的な形にすることもボランティアのひとつです。

それぞれの意思を言葉だけではなく、行動で示すことができる。そして、行動することでさまざまな人が笑顔になり、自分も笑顔になる。それこそが、万国共通のボランティアの特性であり魅力なのではないでしょうか。

一人ひとりの活躍により、この東京2020大会もたくさんの笑顔で溢れることでしょう。



©アマナ



I. Field Cast・City Castについて

ボランティア経験者インタビュー⑤

障がい者への意識もレガシーとして



楠目昌弘 (くすめ まさひろ) さん
自身が病気のため車いすでの生活を余儀なくされ、2010年に大田区障害者スポーツ倶楽部を設立。特定非営利活動法人障害平等研修フォーラム理事

2010年10月に、地元の大田区に「大田区障害者スポーツ倶楽部」を設立したのは、その約2年前に、僕自身が病気で車いすでの生活を余儀なくされたことがきっかけでした。

1年間の入院と半年間の福祉施設暮らしを経て地域に戻ってきた時に、継続してリハビリをやりたくて、当初は週3回くらい北区の「東京都障害者総合スポーツセンター」に通っていたんです。そのなかで、地元にもそういった場所があればいいな、と。

倶楽部を立ち上げて8年が経ちますが、特に東京でオリンピック・パラリンピックをやることになってからは、「多様性」というキーワードが一般化し、世の中の障がい者に対する意識がだいぶ変わってきたようにも感じています。リオ2016パラリンピックで銀メダルを取ってからポッチャの認知度が急激に上がったように、障がい者スポーツ全体への関心も高まりつつあります。さらに東京の街も、バリアフリー新法が制定(2006年)される以前に比べれば、劇的に

暮らしやすくなった。

ただ、僕が心配しているのは、こうした流れや人々の意識が、東京2020大会が終わった後、途端に冷え込んでしまわないかということなんです。

僕が2005年から障害平等研修(DET)フォーラムで、ファシリテーターとしてワークショップ型の研修を行っているのは、そういった流れを途絶えさせないため。実際、この活動をしていると、「人の意識が変われば、社会も変化していく」ということが実感できます。

例えば、群馬の伊勢崎市では、夏祭りのイベントマップを作る際に、DETの研修を受けた運営者の方から意見が出て、一昨年くらいから車いす用のトイレがある場所も地図に入れるようになった。こうした小さな気づきが増えていくことが、何より大切なんです。

研修をしていて心強いのは、若い人たちの考え方がとても柔軟なこと。中高年以上の方の多くはすでに物の見方とか価値観が確立されていて、グループワークで拒否反応を示す方も少なくありませんが、若い人は頭が柔らかいので、気づきを促し、行動を起こさせるプロセスがより短くて済みます。ですから、こうした世代に、僕らがメッセージをしっかりと届けることが、未来に向けて非常に大事なポイントになると思っています。

今はDETの活動に軸足を置いているのですが、スポーツ倶楽部も続けてほしいと言ってくれる人がいる限り、続けていきたいと思っています。

ただ僕自身、ボランティアをやっているという意識はないんです。自分がやりたいから、楽しめるからやっているだけで、これが義務になってしまうと窮屈でしかない。自分の許容範囲を超えない程度で、みなさんが気軽に来られて、居心地の良さを感じられるような場所を提供する。それができればいいんです。

東京2020大会にボランティアとして参加する

人も、「私は自己犠牲のもとに頑張っています」などと考えないことです。肩肘を張らず、自分ができる範囲でやるのがボランティアなんですから。そしてできれば、会場などのハード面も、障

がい者に対する意識の部分も、レガシーとしてしっかりと未来に受け継がれるような大会になってくれればいいと思っています。

ボランティア経験者インタビュー⑥

前提は「大会のミッションを知ること」



竹川隆司 (たけかわ たかし) さん
証券会社勤務を経て、2011年にアメリカで起業。その後、拠点を日本に移し、東北風土マラソン&フェスティバルを立ち上げる。発起人会代表、副実行委員長

東日本大震災が起こった時、私は東京にいたんですが、翌月にアメリカでの会社設立を控えていたため、すぐに渡米しなくてはなりません。その時に、ある種のうしろめたさを感じ、同時に日本人としてのアイデンティティを強く意識するようになったんです。日本のために、東北の復興のために何かしたい——。そんな想いが結実したのが、「東北風土マラソン&フェスティバル」でした。

モデルとしたのはフランスのメドックマラソン(※)

※フランスのメドック地方で開催されるマラソン大会。ワイナリーを巡るコースではワインの試飲ができる。

です。もちろん復興支援がベースにありますが、マラソン大会をフックに、来ていただいた方に土地の食や日本酒を提供すれば(風土にはフードの意味も)、きっとみなさんに満足し、楽しんでもらえるという感覚があったんです。

立ち上げにはかなり苦労しましたが、なんとか2014年4月27日に第1回大会の開催にこぎ着け、今年3月で無事5回目を迎えました(2018年10月現在)。当初1,300人くらいだったランナーも今では7,000人弱に増え、来場者は50,000人という規模になりました。それでも「マラソンで東北と世界をつなぐ」というミッションを掲げている以上、満足することはありませんね。

確かにプライベートの時間はあまりありませんが(笑)、微力ながら東北のためになっていると実感していますし、たくさんの人の笑顔がこの活動を続ける原動力になっています。そして、東北の外からやってきてくれた方がおいしいものを食べて喜んでくれる姿は、地元の人たちのパワーの源にもなっている。そうした人と人とのつながりを見るにつけ、大きな充実感を覚えるんです。

大会の運営は多くのボランティアに支えられていますが、私はボランティアの方も、ランナーや協賛企業の方と同じく、大会の一参加者だと思っています。実際、誰よりもランナーや地元の方と接する機会が多いのが、ボランティアの方ですからね。そうした意識は着実に浸透して

I. Field Cast・City Castについて

います。例えば、大会の1週間前ぐらいにコース清掃を行うんですが、その前から地域の方が自主的に清掃活動を行って来ていたり。それも参加者意識が醸成されてきたからでしょう。

人や地域とのつながりを感じるだけでなく、そこから大きなエネルギーをもらい、ひとつのものをつくりあげる満足感を得られるのは、スポーツボランティアならではの、そうして得たものが次の一步を踏み出す力となって、一人ひとりの意識なり行動なりを変え、ひいては社会を変えていくのではないのでしょうか。

東京2020大会も同じです。ボランティアも大会をともにつくりあげる大切な参加者なんです。

ボランティア経験者インタビュー⑦

「楽しい」ではなく「嬉しい」を届けたい



大住力 (おおすみ りき)さん
東京ディズニーランド等を管理・運営する㈱オリエンタルランドに約20年間勤務し、44歳で独立。公益社団法人難病の子どもとその家族へ夢を代表理事

そうした意識を持って、それこそ100年に一度あるかないかの世界的なイベントを楽しめばいいと思います。

ただ、楽しむための前提としてやってほしいのは、「大会のミッションを知ること」です。その大会が実現したいことを心に刻み込む。そこまでの当事者意識を持ってもらいたい。

ボランティアだからと言って自分を捨てる必要はありません。ですが、ミッションを知ったうえで自分らしく楽しんでこそ初めて、手触り感というか、一参加者として大会をつくりあげた感覚が残ると思うんです。

「お前って、何者なんだ?」

私が初めて自分自身について考えるようになったのは37歳の時。会社の出張でフロリダに行き、そこで『ギブ・キッズ・ザ・ワールド』(※)の創始者であるヘンリ・ランドワースさんに出会い、こんな言葉を聞いてからです。

「ギブ・アンド・ギブ」——。それは言い換えれば「メイク・ア・ライフ」(生きること)であり、生きることとはすなわち、「今、自分にできることを、目の前にいる人にシェアすること」だと、彼は言ったのです。

実は、中学生の時に「ボランティア」という言葉を辞書で調べたら、「無償で奉仕」と出てきて、この言葉に違和感を覚えたんです。けれどヘンリさんと会って話をし、施設内のレストランで初めてのボランティア体験をしているうちに、自然とその違和感が消えていった。

それが、44歳で会社を辞めて『難病の子どもとその家族へ夢を』を設立するきっかけでした。

それから、現在『ギブ・キッズ・ザ・ワールド』の代表を務めている女性からの言葉も衝撃的でしたね。

「リキ、ボランティアってパス・ミー・ザ・ソルトよ」。人から「塩を取って」と言われ、「はい」と手渡す。それがボランティアだと。それでいい、あなたができることをすればいい。それを聞いた時に、ずっと楽になれたんです。

会社員時代の私は働き詰めで、いつも仕事の量や数字のことばかり考えていました。しかし、今は質を追求することを最優先しています。質とはすなわち、「人に嬉しいと実感させること」です。「嬉しい」を辞書で引くと、「人にしてもらったことに感謝しているさま」と出る。それに対して「楽しい」は「自分が満ち足りた時の状態」とある。楽しいではなく、嬉しいと感じてもらえることをたくさん作り出したい。それが今、私が一番やらなくてはいけないことだと考えています。

ディズニーには「振り子の教育論」というものがあります。目の前で起きていることをまずは自分に当てて、「こんなことをしてあげたら、

ゲストが嬉しがってくれるかもしれない」と想像して動けという教えです。私もずっとスタッフに言い続けてきましたが、そのくせ自分には全然当てられなかった(苦笑)。

東京2020大会にボランティアとして参加する人たちも、不安はあるかもしれませんが、とにかく動いてみてほしい。ディズニーランドで、ゲストの方が何に一番感動するかと言えば、実は掃除のお兄さんやお姉さんが一生懸命に働く姿なんです。そうやって動いてみて、「嬉しかった」、「ありがとう」と言われたら、きっと自分も何かの役に立てたんだと実感できるはずですよ。

東京2020大会が終わって20年経ったら、私は74歳。その時、成人したばかりの若い人たちに、「あのオリンピック・パラリンピックは素晴らしいだったんだぞ」って自慢したい。だから、何もせずに後悔だけはしたくないんです。何もやらなければ失敗もしないけど、大した明日もやってこないでしょう。ボランティアのみなさんも、「あの時、やっておけばよかった」と20年後に後悔しないように、今、この瞬間を大事にしてほしいですね。

※難病を患う子どもとその家族に、「1週間の想い出旅行」を提供、支援する非営利団体。

I. Field Cast・City Castについて

あなたは、東京2020大会で
どのように輝きたいですか？



©アマナ

